

三月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

近未来空間

影山 一男 千葉

冬に入るころに注ぐ熱き酒掬ひおこせよわが志

冬の曇りの下にベイシテイ組み立てられて悲哀を閉ざす

豊洲より有明までの近未来空間をへゆりかもめへ飛翔す

昭和の子われを乗せたるへゆりかもめへ生活感のなき街つなぐ
ああこれがオリンピックの選手村機能性よし人間性なし

告白

大松 達 知*東京

なつとうをなつとうどうし掻き混ぜてころとこころつなげるごとし
いつからか床ゆかに置くのがならわしとなりて月謝の六千円置く

柿食えば「飲んでるとこに柿出すな」そう怒りたる父を思えり
わずかにも身がまえるころわれにあり父亡きのちの母に会うたび
ひとりひとりレジに寄りゆき告白をすることし朝のセブンイレブン

あらららら

小山 富紀子 京都

普段着の舞妓の髪にあららら揺れて楽しげキティのかんざし
赤と黄の陣取り合戦今朝もややいちやう優勢もみちあやふし
箒持つわれをはやしていちやう葉のわあいわあいと駆ける坂道
あまりにも楽しく駆けるいちやう葉にも少し遊べと箒を置きぬ
いちやう葉にもみち葉交じるを掃き寄せてしばしながめぬこの秋の高

眼居に抱く

原 賀 子 東京

枯野見をまだ果たせずには昼月のしんと掛かれるわが内の空
新聞の記事を切りぬき茫まなごころとをり中村哲のアフガンの死よ

棺中の夫君であれば眼居まなごころに抱くほかなけむ尚子夫人は

卒然と中村哲がよび覚ますそのかみのハマーシヨルドの事故死
待つことが苦手になつてきましたね待つてる時間ないですものね

☆

☆



水島 晴子 兵庫

ゆうべ見た今年最後の満月と話す声あり朝のリハビリ

うす雲をとほすひかりよ青銅の古鏡のやうに宙の既望は

詮なくて外に出で来れば空ひくくあやかしめきて二重虹立つ

古ぎれに鼻をうづめて犬ねむる瘦せたる胸を地面にまるく

爪のさき欠けたる指で触れるとき生まといふまでの紙の手ざはり

杜 沢 光一郎 埼玉

地底より湧き継げる水あたらしく生きる勇気をはげましくる

かぐはしきものは慕はし咲き初めし梅さながらに人を寄らしむ

あたかなものはたとへば搗きたてのお餅のやうにひとほゑます

愛らしきものはよきかなおろかしき曠と志のほはたと吹き消す

黙ただふかき巖いはよろしもとすれば波立ちやすきころを鎮む

武 田 弘之 神奈川

歌つくるよろこびあればさしあたり生かしたまへ百歳まで

百歳の歌つくるべし農の子として生まれたる執念さもちて

名も美はしき美ヶ原、八幡平選はれてあり「百名山」に

百首歌を詠むべし相模、和泉式部また新潟の友に学びて

百舌啼けばおもふ腹掛新しきわかき大工を詠みし白秋

蒼蒼らに青雲うかびしんしんと時進みをり師走街ぞら
茶るといふ愉しき動詞一つ知り令和元年はつか豊けし

ぬる爛をゆる爛と言ふ人がゐて楽しきかなや年忘れ酒
をみなごに席ゆづらるる人となりて師走車内に心はなやぐ

古き世の諺いはく(年寄りと古骨ふるほね傘は抱へると邪魔)

仲 宗角 三重

伏流水岩間に湧けるひそけさやわがなきあの声なきあの力

山霧のながれの中をくぐりたる山鳩野面にひそむすばやさ

『九鬼周造全集』を読み学徒出陣し九十九里浜で終戦となる

乾パンをかじりながらにあとおひし昭和五、六、七年組とりのこされたり

吉野昌夫戦後の農林信用金庫より電話かけてくれたり三重信連に

奥 村 晃 作* 東京

相良倫子に続いてグレタ・トゥーンベリ十四、五歳の女子は凄いで

しらぬい筑紫に果てし女性二人斉明天皇を想い旅人夫人を想う

一瞬に三十三名あやめたる放火理不尽ガソリン怖い

逃げようもない構造の建物に建築許可は下りていたのか

調べもの根詰めてなし疲れ果てベッドにしばし身をば横たう

森 重 香代子 山口

剪定の終りたる庭しもつきの陽は寂寂と木立に及ぶ

経読みしのみにて声を洩らすなき夕べに茄子のむらさきを炊く

朝宵にわが上ぐる経庭づたふ森に棲みつつ禽は聴くらむ

病むに似てししむらは肥月朝に夕よに経よみて経し一とせの間に

ストープの電流の鳴るおとはして令和元年暮れてゆくなり



狩野 一 男 東京

さざんくわの十二月来てふりかへること多くなる否応無しに
わが本の装丁もしていただいた和田誠さん既に亡しとぞ
巨人軍史上最高捕手として引退したり阿部慎之助
十二月、涙の季節かなしみが止まらないのだ 雪まだ降るな
先入観なく到りたる老境をたいせつにせむ残年すくな

宮里 信輝 神奈川

日影 康子 富山
天皇陛下即位の秋やわが寺へ寄進の大菊は、国華晴れ舞台、
重りて野分に伏しし萱草の根かたにひかる初冬のタンポポ
万象は日々まに涉り清かりし昨夜の半月今日はやいびつ
手を出せば夫は素直にすぎりきて老の極みに邪よあらず
先生の「瑠璃の珠実」の歌の軸かけて新年を迎へむとする

古屋 祥子 群馬

おもねらず生き来しわれぞ思はざりき介護支援の日が迫るとは
立つち、あんよ、児が進歩するその逆に老人の機能一つ一つ減る
福祉施設なれば入浴も洗髪も規則通りにて否応もなし
敷かれたるレールの上をじゆわりじゆわり背を押され歩む認知症彼ら
前頭葉、海馬の毀れ遅らせむ今日のノルマは掛算、筆写

桑原 正紀 東京

膝の怪我かかへて難渋したりけり首都東京は階段地獄
捜し当てしエレベーターに健常者あふれて二基やり過ごしたり
落花生の殻を剥く、食べるその間合ひ妙なるかなや止まらなくなる
両の手で落花生剥き目で選歌ときどきそんなことをしてます
夜半すぎてかすみたる目に度の強き眼鏡かけ替へ選歌をつづく

岡崎 康行 新潟

長兄がガンにあらがふ日々にして今年の賀状失礼しました
「延命措置どうされますか」「お勧めはしません」〈それでお願います〉
「全身の骨に前立腺ガンが転移してます」画像を指して
肺炎の呼吸困難はのりこえぬされども「余命は数ヶ月です」
長兄の「危篤」で「コスモス全国大会」初欠席し向かへる神戸
肺炎の呼吸困難はのりこえぬされども「余命は数ヶ月です」
「延命措置どうされますか」「お勧めはしません」〈それでお願います〉
長兄がガンにあらがふ日々にして今年の賀状失礼しました

小島 ゆかり 東京

集落のなかを流れて熊蟬の声より細き水の音あり
老嫗ら腰掛けてゐる椅子見れば椅子の高さのふとき杉丸太
ざわめきてゐたるあかまつゆつたりと撓たがひし分を取り戻したり
敗戦と叔父の出撃無効の日近づきて近づきて近づきしのみ
戦争の終はり叔父に見えてゐて見えながらとはに遠とほざかりたり
坊主頭の小学生のよき歌あり宮柵二記念館短歌大会
破やぶ間を矢振間と詠みし先生の耳のふかくの心をおもふ
しんとまたしんと試飲ししなごさる越の酒蔵ゆきくらのなか
文化財豪農目黒邸、晩秋の池に鯉をりいのちは動く
去年は北陸新幹線に忘れたるトランク浦佐の旅館こぞに忘る

木 畑 紀 子 京 都

勝手口あければにはふ柀の季節となりぬしんと朝冷え
ひひらぎの苗木三十年をへてぎつしりと花たつぷりと香り
一枝挿すのみに柀のほのがき香につつまるる朝のキッチン
宮柀二おもふ木として植ゑしこと家人は知らずその香を賞でぬ
越の野に小雪まひるむひひらぎの木にあふれたる白小花のごと

島 田 暉 神奈川

老妻と坐るベンチで会話なくお先にと散る竹落葉美し
そとへ出る前に着替へをする妻は羽づくろひする鳩にやあらむ
夫婦にも晴れや小雨の日がありぬ日照雨の止みて残る雨の香
妻は今最寄りの駅に着きたるや鉢に揺れたり白薔薇の花
白ひげの浦島太郎になりたるや妻を忘れて家に着きたり

田 宮 朋 子 新 潟

ペンヤワールの中村哲氏のエッセイをひかる雫のごとく記憶す
「済諸貧苦」といふことばおもひて中村哲氏を悼む
植木職の雪囲ひする荒縄の切り口清く冬に入りゆく
月かげの射す窓ぎはの木の手机しづかに山を憶ふがごとし
七十代はいかなる日々かまつさらな十年連記の日記帳買ふ

津 金 規 雄 神奈川

ああまたも「魔女の一撃」思ひ当たる戯れ事のなしと言はなく
父の形見の杖にすがりて病院へ 秋空のもと妻にしたがひ
「爆弾を抱えていたね」と医師は言ふその暴発ぞ腰痛再発
十日前ふたり小町を歩みしも夢のまた夢けふを病み臥す
病み臥せば伊勢物語の断片が浮かびては消ゆ故知らねども

清 水 正 子 神奈川

歌仲間四人でひとつテーブルを囲めり今日は食事楽しまむ
RのつくNovember いまは牡蠣の旬、能登の穴水おもひつつ食ぶ
ああ雲が螺鈿さながらに輝きてスカイコラージュす八階の窓を
雲が好き雲になりたいときもある水滴坊やと旅がしたくて
牡蠣を食べ雲を眺めて旅おもふそれのみに足る今日のこころは

小 嶋 一 郎 佐 賀

猫の爪剪るワルわれを只一度叱りし祖母のけふ六十回忌
亡き父のこの腕時計螺子巻けばいまは動く五十年経て
電源の差し込みの穴ふた箇所のひとつが潰る本棚置けば
平戸産焼き飛魚齧りつつ思ふサビエル像とも久に見えず
分け隔てなく冬日射す新築の隣り家とこの古きわが家と

後 藤 美 子 北海道

鴉よけのテグスをくぐり入り来たる鶴鶴ペランダを調査して去る
雑穀と水を備へて三日経ぬ鳥来ずうすく埃が受けり
夜の闇に触れたればコボと音がせり夫が入歯をつけおくケース
玄関に立ちて待つらしせつかちが頓に増したる夫との外出
散文に対せば同じき「詩」なれど距離あり短歌と自由詩のあひだ





福士りか 青森

令和元年終はらむとして雪降らず読み始めたり『方舟さくら丸』
自己完結型の甲虫ユー・プケッチャ安部公房の生みたる陰喩
つま先からほぐれほぐれて繭になるこれもまた自己完結の生
秒針のやうに回りつづくる生ユー・プケッチャは円に籠もりて
麒麟いまだ現はれ出でずはさはさとユー・プケッチャの増えゆく気配

藤野早苗 福岡

鳥賊獲れずなりしふるさと色褪せた大漁旗が浜風に揺る
病み篤き地球に出された処方箋 S D G s 十七項目
カフエラテの湯気ふうはりと冬隣頬のうぶ毛をしめらせてゐる
袈裟懸けに斬りたき背といふでなし わたしを置きて北へ飛ぶひと
緯糸の刀杼はしれば沙漠ゆく駱駝生れたり手織の機に

風間博夫 千葉

「蟻地獄」^{アリジゴク}「蟻巻」^{アリマキ}は虫、「蟻通シ」^{アリドオシ}常緑樹木、「蟻径」^{アリケイ}はこみち
「蟻吸」^{アリスイ}はキツツキ科の鳥、「蟻食」^{アリクイ}は蟻食ふアリクイ科の哺乳類
送蟻、蟻柄、蟻穴木材をつなぐつぎめの専門用語
なぜ君の眼鏡にかなひわれ夫となり得たりしか思へど解けず
われを選ぶ眼鏡違ひを妻犯したりしか否否よき夫得たり

田中愛子 埼玉

「秋桜」^{アキオウ}の名前したしも十五人の仲間と母が暮らせるホーム
夢なか現実なか分からぬと母が言ふときおほかたは夢
逆年順に編まれし歌集読みさして飲む冬の夜の白湯やはらかし
はつゆきが包みてをらん母が住むホームの屋根のうすみどり色
「お二人で」ことしもビール届けられ夫が下戸といまさら言はず

橘芳園 新潟

この寺で死なせて欲しと言ふ母をおき去りにしてわれは出できぬ
朝な朝な御堂に仏供を上ぐる母ひとりのこして寺を出でたり
母捨てるまた厭ひきし寺捨てる二河の地獄に白道がなし
一人に詫び二人目に詫び五人目に詫びを言はむとして目覚めたり
住職も僧も辞めたり歌詠むに袈裟も衣も御堂も要らず

水上比呂美 東京

山手線をぐるぐる廻る特典を受けたる男居眠るをとこ
伊邪那岐命は恐妻家であらう左の薬指に指輪して
ケータイの着信音がおごそかに鳴り出だしたり男の胸より
着信音ベーターベンの「運命」が夜の車内に響きて止みぬ
環状の山手線に始発駅、終着駅のあるを知りたり

鈴木竹志 愛知

駅伝の季節となれば駅伝を見るに如くなし直向きが良し
同人誌編集といふも駅伝に似てゐる気がす古稀にちかづき
「ドベ3」と言ひて通知表取り出しぬ女子高生が向かひの席で
「ドベ3」は恥づかしきことではなくて自慢することなるか近ごろは
「2と3のオンパレードよ」と女子高生はあつけらかんと友に言ふ

水上 芙季 東京

天かぞふ大波小波さみしさはだんだん小波 月が昇るよ
混濁の多摩川にアイコン変へし人、それから無言、遺品のやうだ
混濁の川はわれにも揺蕩つてそれを誰かが見てゐるだらう
BOOKOFFへお遍路のごと通ふこと霜月にありそして終はりぬ
一年後また一年後を思ふときふいに風立つ世田谷通り

大野 英子 福岡

立冬を過ぎてなかなかはじめらぬ冬の挨拶「ぬくかですねえ」
新米の奉納米のちらし寿司いただきて食ふすべて忘れて
交はず語らず過ぐす休日の軽やかにしてさみしくはなく

松尾 祥子 東京

老後など憂ふはヒトのみ餌捕れぬすなはち(死)なる自然の摂理
満身に朝日をあびて揺れやまぬあふちの実ふと止むときもあり
汚染海水に流せる極東の島国に降る長月の雨
冬に入る前の明るさ街路樹は黄金のこゑこほしやまずも
生き方が一首ににじみ出すやうな絵手紙に友が描く水仙
歌会後の忘年会の華やぎぬ九十代も四人混じりて
歌できぬ話でもりあがりながら歌の話は尽きることなし



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 一六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋 夜 吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九-八一〇六

木畑紀子歌集 令和元年7月刊 二七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

かなかなしぐれ コスモス叢書第1157篇 現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一一二-二二〇

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘 藍 の 扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三一六-三〇二

島田 暉歌集 令和元年9月刊 一六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記 憶 の 炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一一一四-一六